

生徒が主体的に学習し、美術の基礎的・基本的な能力を伸ばす題材の開発

～言語活動を取り入れた学習を通して～

小俣 直喜

1 美術科の研究主題について

中学校学習指導要領・美術科の目標には、「表現及び鑑賞の幅広い活動を通して…美術の基礎的な能力を伸ばし…」とある。ここでいう「美術の基礎的な能力」とは、表現の能力と鑑賞の能力のことであるが、表現と鑑賞のそれぞれにおける基礎的・基本的な知識・技能と、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力を伸ばすためには、生徒の主体的な学習活動とこれらの能力を関連させながら有効に働かせることが重要だとされている。

そこで、本校美術科では、美術の基礎的な能力を伸ばすために、生徒が主体的に取り組める題材の開発について研究しようと考えた。昨年度の本校美術科研究主題は「感性を豊かにし、生徒が主体的に取り組む題材の開発」であった。美術の基礎的な能力を伸ばすために、「感性の豊かさ」の育成に着目してきた。本年度からは、豊かな感性の育成を目指しつつ、「生徒が主体的に学習する」ための、魅力があり有効な題材とは何かということの研究をしたい。

さて、表現および鑑賞の学習において、発想や構想を練るときに言葉で考えを整理することや、作品などについて批評し合ったりすることなどの言語活動を取り入れることは、有効な手だてであるとされている。それを実践するため、言語活動を含む主体的な学習活動を計画的・効果的に取り入れることとした。

表現の学習は、まず、課題について理解し、主題を発想することから始まるが、これから制作しようとする作品の主題や題名を言葉として記すようにすることで、「この課題について、この主題でよいのだろうか」と客観的に考えることができる。あるいは「この題名ですすめよう」という意欲につながる。次に、色や形、使いたい材料、表現方法等と関連させながら発想し構想を練るが、ここでも、自分の考えを整理したり、取捨選択したりするために、アイデアスケッチと併せて言葉で記しておく。試行錯誤しながら表現していく中で、当初の発想や主題、表現意図に照らして材料や用具の生かし方を決めたり（あるいは変更したり）、他者と意見を交わしたりする際にも有効であろう。

鑑賞では、作品などの対象について、自分なりに感じ取った作品に込められたテーマや作者による制作の意図、全体から受けるイメージなどについて言葉で書き表す。それを基に意見を発表し合ったり、話し合いや批評などで他者と意見を交流したりすれば、多様な価値などに気付き、見方や感じ方を広げることができるであろう。

このように、生徒が主体的に取り組める学習課題があり、成長や進歩を実感し、充実感を味わえる魅力ある題材の開発と授業のあり方について実践を重ねていきたい。

2 全体研究と関わって

本校の研究では、「自ら問う力」は、主体的に学習を進めていく上で重要な要素となり得るとして、この力を生徒に付けさせたいとしている。「自ら問う力」を育むことによって、「思考力・判断力・表現力」を育成することとしている。（なお、ここでの「表現力」は、美術科における表現力とはやや異なる）

美術科における「自ら問う力」を育む学習活動は、表現と鑑賞のそれぞれ次のように考えられる。

表現の学習では、与えられた課題について、「何を主題にするか」「どのような材料や技法を用いるか」「どのような手順で制作するか」など、生徒が表したいことを具体的な形（作品など）にする中での様々な問題に当たりながら学習を進めていく。「友だちを描こう」などの人物画を例に挙げてみる。基本的な鉛筆の持ち方や画面への納め方、一般的な人物のプロポーシオン（人体比率）、陰影の付け方などについては、生徒は知識として教わることはできる。だが、対象となる人物（友だち）を目の前に描こうとするときには、対象と画用紙の間を何度も視線を絶えず往復させ、「頭が大きすぎないか。体の形は合っているか。どこから光が当たり、どこが陰か。」などと問い続けなければならない。また、友だち人柄や特徴、雰囲気まで表現するにはどのようにしたらよいかという課題にも向き合わなければならないであろう。描き終えた後も、意図したとおりに表現できたところやできなかったところについて、指導を受けたり他者と評価し合ったりしながら自分で判断し理解していくことで、表現の能力は伸びるのである。このように試行錯誤しながら描いたりつくったりすることが、「自ら問う力」を育むことになるのではないだろうか。

鑑賞の学習では、作品などに対して「何が描かれているのだろうか」「何を表しているのだろうか」「作者は、この作品をとおして何を伝えたいのだろうか」「それはなぜだろう。なぜ、その作品をつくったのだろうか」「作者の意図

はこういうことではないのだろうか」・・・といった、「問い」が生徒の心の内から生じる。この「問い」について主体的に取り組もうとする態度を育てることがここでは大切である。この「問い」を学級の生徒全員で共有し、自分の見方・感じ方で主体的に鑑賞し考えを発表したり、友達の意見に耳を傾けたりして、自分と違う視点や多様な価値観に気付くような学習活動により、生徒は作品の見方、味わい方などの鑑賞の能力を高めていくであろう。

このような学習活動の積み重ねが、「自ら問う力」の育成につながるであろうと考える。

3-1 実践例①

① 題材名 「岡本太郎《森の掟》(川崎市岡本太郎美術館蔵)から」 (「B鑑賞」)

② ねらい

- ・作品に描かれているものを読み取り、思考力を働かせて作者の意図を想像する。
- ・自分の価値意識を大切にしながら文章に表したり発言したりして深く作品を味わう。
- ・友だちの意見を聞き自分の考えと比べることで、多様な作品の見方があることに気づく。

③ 題材について

ここでは、鑑賞の題材として岡本太郎の《森の掟》(1950年・川崎市岡本太郎美術館蔵)を扱う。岡本太郎(1911~1996)は、戦後の日本の前衛芸術(アヴァンギャルド)をけん引し、1996年に没するまで、旺盛に制作し、強烈な存在感を示してきた芸術家である。今年、生誕100周年を迎えたこともあり、再評価され注目されている。岡本の代表作《太陽の塔》制作にまつわるドラマの放映(NHK)をはじめ、マスコミでも多く取り上げられたり、各地の美術館で企画展が開催されたりした。美術雑誌でも特集が組まれたり、著書が復刻されたりもしている。

しかし、知名度の高さに比べ、大阪府の《太陽の塔》や、東京都のJR渋谷駅構内に展示されている《明日の神話》以外の作品については、一般的にはあまり知られていないようだ。その理由として、学校教育の中でも、岡本太郎が題材としてあまり取り上げられなかったことが考えられる。

これまでも多くの鑑賞の授業で扱われてきている題材として、岡本とほぼ同じ時代を生きたピカソ(1881~1973)の《ゲルニカ》を例に挙げてみる。1937年、ピカソの祖国であるスペインの地方都市ゲルニカで、ナチスによる無差別爆撃が起きた。《ゲルニカ》は、この悲惨な事件を非難するために描かれたことは有名なエピソードである。画面上に表現された、子どもを抱いて泣く母親や無惨な姿となった兵士などを見れば、非道な暴力に対する憤りを感じることができるし、反戦、平和というテーマもわかりやすい。ピカソという人物についても、テレビ番組にも名前が使われているなど知名度も高い。したがって、内容や作品の価値が明確で、教えやすい題材であろう。

このような題材に比べると、岡本の作品はどうだろうか。《ゲルニカ》のように、強烈なテーマを岡本の作品はもっているのだが、作品を一見しただけでは、何を言いたいのかは分かりにくい。また、何が描かれているのかは分かるのだが、それが何を意味しているのかは、すぐには分かりにくい。

本授業では、《森の掟》を扱う。これは、全くの抽象絵画ではないため、描かれているものを丁寧に読み取ってことはできそうである。それらを手がかりに鑑賞することにより、作者が込めた意図について自由に想像できるのではないだろうか。

《森の掟》を見ると、まず、画面中央に描かれた真っ赤な生き物(猛獣?)のようなものが目に飛び込んでくる。その生き物に、いかにも無力な人間(?)が、今まさに食われようとしている。これは、何を意味しているのだろうか。赤い生き物は何の象徴なのか。周りに配されているものは何か。この作品について作者が語った言葉から、この作品に込めたテーマをわれわれは想像することはできる。例えば、この生き物の背中には大きく無機質な「チャック」があり、背中「チャック」を開けてしまえば、この恐ろしい生き物も中身をさらけ出してしまうという。そこに重要な意味が込められているようだ。

この作品には様々な仕掛けがあり、謎解きのようにテーマを想像する楽しさがある。じっくりと鑑賞するほどに、新しい謎に出会うということも、岡本の作品の特徴だ。生徒一人一人が、描かれているものから作者の意図を感じ取り、互いに意見を発表したり聞いたりする中で、この作品には、作者によるメッセージが込められているということに気づいていくであろう。その活動こそが、この学習のねらいである。

岡本が、著書『今日の芸術』の中で「芸術は、ここちよくあってはならない、きれいであってはならない、うまくあってはいけない」と述べているとおり、この作品も鑑賞者に心の安らぎを与えるようなものではない。むしろ、鋭

3-2 実践例②

① 題材名

「みて、感じて、語ろう!・・・石井精一《暈の記憶 (B)》(山梨県立美術館蔵) から」
新学習指導要領 B鑑賞(1)[共通事項](1)

② ねらい

- ・作品のよさや美しさ、おもしろさなどを主体的に感じ取り、味わう。
- ・作品に対する自分の思いを大切にしながら文章に表し発言したり話し合ったりして作品に迫る。
- ・他者の多様な考えに気づき、作品などの見方や感じ方を広げる。

③ 題材について

この授業は、鑑賞する作品について自分の意見をワークシートに記述して発表したり、他者と意見を交流したりするなどの活動を通して、探究的に作品を味わっていく学習である。最初に作品を見たときに感じた「私の感想」から、話し合いをとおして「友達の思いや考え」に触れ、作品がもつ多様な価値に気づき、「見方や感じ方の広がり」へと展開していくようにしたい。そのため、この授業においては、この作品に関わる理論や考え方、表現技法などの解説を聞いたり、作者の経歴などの知識を覚えたりするような学習は行わないこととした。

さて、鑑賞の対象となる《暈の記憶 (B)》は、山梨県立美術館に所蔵され、同美術館の特別展「県美30年の歴史 わたしが選ぶこの一点」(平成20年)のために行われた投票においても多数の票を得た人気作品である。シュールレアリスムの手法をとりながらも、「暈」「原稿用紙」「浴衣」など日本的なモチーフによって描かれており、親しみやすく鑑賞経験の少ない1年生の題材としても適した作品と言える。美術館で直に鑑賞することも可能であり、地域の美術館へ関心をもつことにもつながる。これも、この作品を取り上げた理由である。

本時では、山梨県立美術館の学芸員をゲストとして授業に招き、生徒の学習の場面に立ち会い生徒の作品の見方や感じ方について評価していただく。

このような学習を通して生徒の意欲が喚起され、美術の多様な表現への興味関心がさらに広がっていくことも期待できる。

④ 全体研究とかかわって

- ・本題材における問い

「問い」について、本校美術科では、必ずしも正解を求めるようなものではないととらえている。

生徒が表現や鑑賞の課題に向き合っているときには、常にそれぞれの生徒の内に「問い」が生じているであろう。この「問い」に対する「答え」は、生徒それぞれで違うものであり、したがって、表現している作品や、感受した思いなどもそれぞれ同じではないはずである。いわゆる(正しい答がはっきりしているような「閉じた問い」に対して呼ばれている)開かれた「問い」をめぐる、創意工夫し試行錯誤しながら表現したり、他者と話し合うなどしながら鑑賞したりすることが、「自ら問うている姿」であり、美術の能力を育てるための重要な学習活動であろうと考えている。

- ・問いをめぐる学習

本時は鑑賞を行うが、作品についての既存の価値や解釈を覚えることが目的ではなく、作品のよさや美しさなどを主体的に感じ取り、他者と交流しながら深く味わう学習活動そのものがこの学習のねらいである。ここでは、次のような学習活動の中で、生徒に「問い」をもたせ、「問い」について考え、探究的に鑑賞していくようにしたい。

まず、対象となる作品を前にしたときに、「美しいな」「おもしろいな」という感動が、生徒の心に少なからず生まれるはずである。そこで、「なぜ美しいと感じたのか」「なぜおもしろいと感じたのか」「どこがおもしろいのか」などの、作品を深く味わうための「問い」をめぐる、言語活動を取り入れながら展開していくこととなる。さらに、その「問い」に対して、生徒それぞれが自分なりに身に付けてきた見方や知識を活用しながら洞察し思考し、他者と話し合いながら見方を広げ、作品への新しい価値を見つけ出す創造的な活動を行っていく。

生徒は、このような言語活動を含む主体的な活動を取り入れた学習を通して、作品の見方や感じ方を深めるとともに、他者の個性を知り、互いのよさを認め合う経験を積む。そして、自分と他者との価値を確認できるような学習活動の積み重ねは、豊かな人間性の形成にも寄与すると考える。

⑤ 評価規準

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
作品のよさや美しさ、作者の心情や意図と表現の工夫などに関心をもって主体的に感じ取ろうとしている。	作品のよさや美しさ、鑑賞する対象のイメージ、作者の心情や意図と表現の工夫を感じ取り、自分の思いや考えをもって味わっている。

⑥ 展開

	学習活動	指導上の留意点・評価方法等
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 本時の授業のねらい、ルールを確認する。 1 作品全体から感じたことはなんだろう。 <ul style="list-style-type: none"> 自分が気付いたことを発言する。 自分が気付いたことと友達が発言したことなど、作品から最初に感じたことなどをワークシートに記入する。 	授業のねらい、発言、聞き方のルールについて、理解させる。 描かれている内容から読み取らせる。 自分の考えの根拠を明確にさせる。
展開 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> 2 もう一歩、絵に近づいてみよう。 <ul style="list-style-type: none"> 自分が考えたことを発言する。 友達の発言などを基に、作品について話し合う。 話し合ったことを基に、この作品についての価値について確認し合う。 自分が気付いたことと友達が発言したこと、話し合いで得たことなどをワークシートに記入する。 	発言、聞き方のルールの中で授業が進むようにする。 発言については、自分の考えの根拠を明確にさせる。 発言よさを見つけるようするなど、発言しやすい受容的、開放的な雰囲気をつくるようにする。 評価規準 (関) <ul style="list-style-type: none"> 主体的に作品を感じ取ろうとしている。 (鑑) <ul style="list-style-type: none"> 作品から感じるよさや美しさ、イメージなどについて、自分なりの言葉で記述したり発言したりしている。 友達が感じている価値に気付いている。 自分の考えや思い、友達の考えを踏まえて、探求的に鑑賞している。 【ワークシートの記述・発言の内容、観察】
振り返り・発展 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 3 県立美術館の春原学芸員のお話を聞こう。 4 授業の感想を書こう。 <ul style="list-style-type: none"> 授業を振り返り、この学習で学んだことや、作品の見方、感じ方の深まりなどについて、ワークシートに記述する。 感想を発表する。(挙手、または指名) 本時の学習のねらいが達成できたかについて、全員で確認する。 	評価規準 (鑑) <ul style="list-style-type: none"> 授業を振り返り、この学習を経たことで作品から感じるよさや美しさ、イメージなどの見方や感じ方が深まったことに気付いている。 【ワークシートの記述・発言の内容、観察】

5 成果と反省

本年度は、鑑賞の授業提案を行った。一つの作品を巡って、生徒それぞれが感じたことを発言し、意見を交流するなど、言葉によるコミュニケーションという言語活動をしながら、作品に迫ることを試みた。それにより、それぞれの考えの違いや、多様な価値に気付くなどの経験を通して、より深く作品を味わうことができた。そればかりでなく、自分の意見が大切にされたという満足感や達成感も、授業の重要な目的であることも分かった。

研究会では、美術科における問うべき問いとは何か、問う力とは何かということについて共同研究者、研究協力者の方々と議論を重ねてきた。美術の授業での「問い」は、正答を求める「閉じた問い」ではなく、さまざまな答えが引き出される可能性のある「開いた問い」でなければならないことが改めて確認された。しかし、「問い」については、「その題材のねらいに迫るために問うのか」、「美術科として身に付けさせたい資質や能力の定着を図るために問うのか」、「課題を解決するための力を養うために問うのか」・・・、ということも考えていかなければならないことも分かった。

美術教育は「美術を学ぶ」だけではなく、「美術を通して学ぶ」場でなければならない。アメリカのガートナー美術館では、「美術を通して考える」という、「アートを見ることによって子どもの批判的思考を育てることを明らかにしたプロジェクト」（「100人で語る美術館の未来」福原義春編・慶應義塾大学出版会）に取り組んでいる。思考を「問う力」と置き換えれば、本校の研究の中で美術科が取り組むべき課題がそこにある。

美術科は、題材や内容、年間学習計画など、他の教科と比べると授業者の裁量による部分が多い。生徒にとって、より効果的で、魅力のある題材を提示していきたい。

6 参考文献ほか

① 参考・引用

- ・文部科学省，中学校学習指導要領解説 美術編，平成20年9月
- ・文部科学省，言語活動の充実に関する指導事例集【中学校版】，平成23年5月
- ・山梨県立美術館HP <http://www.art-museum.pref.yamanashi.jp/>
- ・上野行一監修，「まなざしの共有」，淡交社，2001年

② 協力

- ・山梨県立美術館